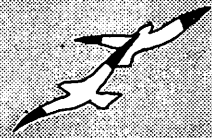


小学一年生は生育過程の 重要な転換点



編集部

はじめに

三月七日、研究所主催で「シンポジウム・小学一年生」を開催しました。研究所が昨年来取り組んできた「小学一年生の総合的研究」の一環として、これまでに行った調査結果についての報告を行い、保育や学校の現場を受け持つ先生たちと親たちからも検証してもらおうという意図で開かれたものです。

このシンポジウムの開会の挨拶で八木三男所長は、研究のテーマに「一年生の研究」を選んだ動機に触れて次のように述べました。

—わたくしたちは、小学一年生への就学は、子どもの生育過程でもきわめて重要な意味をもつ転換点だと考えている。就学によって、文字や数字を系統的に習得し、文法的に正しい日本語で話したり書いたりする

ことを学ぶという生活が始まる。また、学級という集団に組織されてお互いにかかわり合いながら共同して行動することが課せられ、子どもの生活の「社会化」「学校化」が急速にすすむ。

四歳の孫の例だが、あるとき懐中電灯をもてあそびながら「カイジュウデントウ」といい、「これで草むらにいる怪物をみつけるのさ」と、それなりの理屈をつけて説明した。一般に幼児のコトバは親しい人との一対一の対面的な会話で成り立つから、これには大人がコトバを補って対応する。しかし、就学すると事情は一変する。誰にでも通じるコトバでなければならぬだけでなく、書きコトバも入ってくる。先生がコトバを補ってくれるとはかぎらない。話しコトバでも文として形成されなければならない。子どもにとって当然大きな変化であり負担となる—

一、幼児におけることばの学習

子どもは、乳児の初期の段階で大人（母親）の音声聞きながら日本語の「音」の領域や音調の識別ができるようになり、やがて喃語なんごを発するようになり、十〜十一カ月頃には特定のことばに特定の音声に対応させて発声できるようになります。そしてほぼ二歳前後から、表象機能の発達にともない、広がる自分の経験や知覚と結合させてことばを獲得しながら次第に語彙量を増やしていきます。五歳児ともなれば約四〇〇〇の生活語彙をもつといえますから、この時期になれば日常生活に必要なコミュニケーションの機能は概ね備わっていると考えてよいでしょう。さらに、五歳を過ぎると（もちろん個人差はありますが）文字にも関心をもち始めます。五歳児の十一月で七八パーセントの子がひらがな清音の読み書きができるという調査があります。（国立国語研究所Ⅱ一九八五年）。今はおそらく小学校入学時で、ひらがな清音の大半が読めるという子は九〇パーセントを超えるでしょう。

ことばや文字の獲得の場合ほど意識的ではないにしても、子どもは就学のずっと以前から日常の生活や遊びのなかで数に関しても多くのことを学んでいます。

生活のなかで、物を分配すること、大小の比較、そして簡単な足し算や引き算の場面にも出会っており、その経験を通して一対一の対応や簡単な個数の呼称・加減などができるようになってきます。

しかし、就学前期までの子ども（幼児）のことばの習得は、あくまでも自然発生的な学習によるものだということが特徴です。主にあそびという活動のなかで、子どもはあれこれと表象をふくらませてことばに意味をもたせ自分のものにするわけですが、先に紹介した「カイジュウデントウ」の例のように、その意味づけはかなり主観的です。よくいわれるように、幼児の場合の学習のプログラムはほかならぬ子ども自身が決めているのです。仮に親や保育者が組織的にことばや文字学習（教育）のプログラムを設けて学習させようとしても、子どもが自分の興味や思考水準に合った自身のプログラムをそこに見いだせなければ、子どもにとってその学習計画は何の意味はもちません。

二、「一年生」ということの意味

それに対して、子どもが学齢に達し学校に入るということは、子どもが学校がつくったプログラムによって学習するという大きなステップを意味します。

子どもは、これまで述べてきたように、すでに多くのことを身を着けていますし、ほとんどの子がひらがなも読めるようになって一年生に入學してきます。それらがこれからの学校での学習（教育）を支えるだいな土台であることはたしかです。しかし入学当初の子どもたちは、自分の話すことば——例えば「つくえ」や「ともだち」がいくつの音節からなっているのかをあまり意識していません。ひらがなの読み書きができるといつても文字の識別ができるというだけで、音声化してもすぐにはその「ことば」の意味と結び付かない場合も多いのです。一年生のことばの学習（国語）はそこからはじまりますが、就学前のことばの学習との大きな違いは系統的に組織された「書きことば」の勉強だということです。書きことばの学習をはじめるということは、ことばによって考える（言語的思考）生活がはじまるということを意味し、それは表象機能のたいへん高度な精神活動に属します。子どもはしかも、それらをマンツーマンで教わるのではありません。学級という基本的には同質の集団のなかで、これまでの経験を通して蓄えた一般的な生活概念をお互いに交流し合いながら共同して学習をすすめます。

六歳という学齢の時期の特徴について、ここでは主

としてことばの学習（教育）の場合を述べてきました。が、身体や感情（感性）の発達、社会性の発達などの面でも、大きな飛躍を可能にする時期でもあります。そういう意味で、私たちは小学一年生を生育過程の重要な転換点ととらえ、一年生をとりまく社会・経済条件、学校教育、就学前教育、家庭生活、文化環境、心身の発達、親の意識・子どもの意識等々を新潟県に即して把握・分析し、そこを切り口にして、全体として今日の子どもが抱える問題状況を総合的に明らかにしたいと考えました。

三、様が変わりした最近の一年生

どうとらえ直すかは課題

ところで、「一年生研究」班がこれまでに実施した調査や前記シンポジウムでの報告などから、最近の一年生の子どもたちの様子が、ひと昔前とはずいぶん違ってきていることが改めてわかってきました。

一年生担任へのアンケートで、回答者の三六パーセントが自分のクラスは「わいわい賑やかだがちゃんと学習している」と答えました。一年生の教室が「わいわい賑やか」になるのは自然なことで、それは子どもたちの活動意欲の現れであり、きわめて正常な状態と

いえます。しかし同時に、四六パーセントからは「席を立つ子や私語する子が邪魔をして思うように授業がすすまない」との回答が寄せられました。子どもたちへの直接のアンケートでも、ずいぶん気になる実態が浮かび上がってきました。就寝が九時半以降という子が四三パーセント（うち半数は一〇時以降）、朝七時以降に起床するという子が二六パーセントもいます。しかも、床についても「なかなか眠れなかった」という子が三二パーセントにもおよびました。朝から眠い目をこすって登校する姿が見えてきます。そして二四パーセントの子が「授業中、早くこの時間が終わってくれないかと思っている」と答えています。四〇人クラスで一〇人がこのような状態だったら、授業を成立させることはたいへん困難になるでしょう（片岡弘「アンケートのなかに子どもの生活が見える」参照）。

本来この時期の子どもたちは好奇心がたいへん旺盛で、何でも知りたがり屋、やりたがり屋のはずなのですが、そんな幼児心理学の常識など通用しなくなった子が実は増えてきているのです。

ごみをポイと棄てた子に「〇〇君それ拾って」と言ったら「どうしてぼくが拾わなければならないの?」と居直る子―家庭の事情や環境の変化で生活のフレーム

が歪んでしまっているのでは…と危惧されます。生活リズムの崩れも大きな問題ですし、精神的に不安定な子ども目につきます。このように、さまざま問題を抱えたたしかにこれまでとは違った子どもたちですが、私たちは、その実態を直視しつつも子どもたちの現実を受け入れることから始めなければなりません。そのためにも親と教師の信頼と共同がどうしても必要です（高橋武昌「むかしの一年生とどうちがうの―父母地域との共同の子育てが大切」参照）。

「小学一年生」に起こっている問題のいくつかは、幼稚園・保育園においてすでに現れている問題でもあります。「見て、見て」「聞いて、聞いて」と主張できない子、視線が合わない子、子ども同士より大人との接触をもとめる子、生活の基本が乱れている子…など、気になる子どもの言動が目立ってきています。親は、忙しさのなかで子どもとの会話を成立させにくい状況におかれ、その上あふれる子育て情報に振り回されています。乳幼児期は人間としての土台づくりの大切な時期なのに、早期教育と称して文字や数字を教えようとする風潮が強まっています。親と保育者の共同で、いつそう子どもとの人間的なつながりをだいにした子育てを目指さなければなりません（丸山初代「就学

前の子ども一人と交わって人になる親と子のいま」参照。

一方、例えば西蒲原の海浜に散在する越前浜、角田浜、五ヶ浜などの子どもたちは、豊かな自然のなかで実に健やかに育っているといえます。子どもたちの親に当たる若い世代は新潟や巻町に通う勤め人ですが、祖父母の世代がメロン、すいか、たばこなどの砂丘地農業を営み、また、夏の期間は浜茶屋も経営します。

ここは昔は、女性が毒消し売りに出かけ、男たちは製塩の仕事をしていたというところで、親（家）同士のつながりも強く、集落全体で子どもたちを大事に見守る気風があるといえます。メロンの収穫期にはラベル張りを手伝い、浜茶屋では家族の労働を目の当たりにして育つ子どもたちです。多くの一年生の子たちの放課後は、おやつを食べ食べ友達の家をはしごして遊ぶのが日課とか：（立石由美「地域生活のある小学校のよさ」参照）。ここにはひと昔前の子ども姿を彷彿させるものがあります。もちろん、昔はよかつたなどというつもりはありませんが、生活基盤の急速な変貌によって、私たちが何を失ったかを知るよすがになるだろうと思えます。

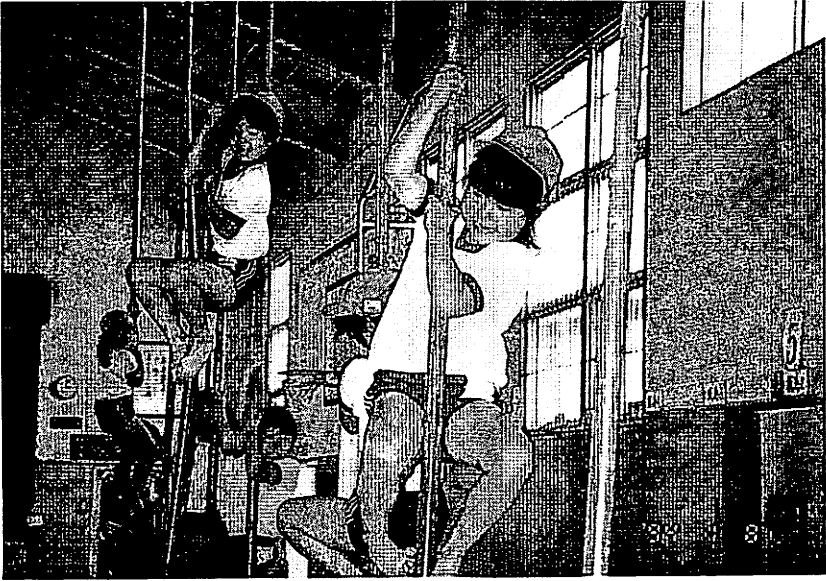
四、子育ての方針を自らのものに

一年生の七月で「うちの子は、もう、算数がわからないって……これって「おちこぼれ？」と嘆く母親の声を聞きました。「六歳の子が、もう挫折感にさいなまれるなんて、何か間違っているんじゃない？」と別の母親はいます。さまざまな情報が耳に入ってきますから、特に子どもの就学を目前にしたお母さんたちの場合、「どんな先生に受け持たれるのだろうか」「いじめには会わないだろうか」「そして何よりも「ちゃんと勉強についていけるだろうか」など、不安と心配は募る一方です。最近の、教育産業の執拗な学習教材の売り込みなどがそうした不安をいっそうかきたてているとも考えられます。

しかし、氾濫する子育て（教育）情報に振り回されて一喜一憂したり、ぼやき合っているだけでは状況は少しも進展しないでしょう。お互いの経験を交流し合いながら、親同士の共同で子育てのポリシーを自らのものにしていく努力が、いま求められているのではないのでしょうか（横山英子「一年生でおちこぼれるってほんとだった」参照）。

研究所の「一年生の総合的研究」はまだ緒にいたばかりですが、本特集はいまの時点でのいわば中間報告です。

（片岡 弘）



【次号（第五九号）予告】

特集・就学前の子育て

・乳幼児医療からみた子どもたち

小児科医のみた子どもたちの心身の発達課題：佐野 康子

歯科医のみた子どもたちの食生活と発達の課題：谷田部雄二

・年齢別の保育の課題

乳児期の保育……菅井 美佐

三才期の保育……遠藤 ゆみ

四才期の保育……交渉 中

五才期の保育……丸田美枝子

・保育園で子どもが育つ、大人が育つ、園が育つ……広井 茂道

・統計から見た新潟県の乳幼児の心身の発達状況……編集部

・新潟県の幼稚園……編集部

・小学校三年生の算数……岡野 勉

小学校でおこなった大学の算数教育

学生は教育現場でなにを学びとったか

地域は大学の試みをどう受けとめたのか

・車社会を考える……関野 征士

・教育課題を論議できる校務づくり……三井富士夫

・朝日村奥三面の遺跡群と自然……（川上真紀子）交渉中